

Title	ベルクソンにおける空間の憑依
Sub Title	L'obsession de l'espace chez Bergson
Author	西山, 晃生(Nishiyama, Teruo)
Publisher	慶應義塾大学倫理学研究会
Publication year	2020
Jtitle	エティカ (Ethica). Vol.13, (2020. ) ,p.75- 90
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12362999-20200000-0075">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12362999-20200000-0075</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ベルクソンにおける空間の憑依

西山晃生

はじめに

ベルクソンが『意識に直接与えられたものについての試論』(以下『試論』)<sup>1</sup>第二章で目指していたのは、「持続」という形で展開する意識の諸状態を取り出すことだった。「全く純粋な持続は、私たちの自我がただひたすら生きるとき *se laisse vivre*、…私の意識的諸状態の継起が取る形態である」(DI 74-5)。しかし、このことはただ無反省に生きるだけで純粋持続の表象が得られるということの意味しない。逆に、私たちはそのような表象を得ることに「信じがたい困難を覚える」(DI 79)。それは、持続が「無意識のうちに空間へ置き換えられてしまう」(DI 79)ためだ。したがって「断固たる分析の努力」(DI 96)によって持続を空間から切り離さなければならぬ。そこで障害となるのは「空間」という観念の根強さである。ベルクソンはそれを「空間の憑依」(DI 100)と呼ぶ。私たちは空間に取り憑かれているというのである。

---

1 ベルクソン『意識に直接与えられたものについての試論』からの引用は著作の略語と頁数によって指示する。引用される版は以下のとおりである。

DI: *Essai sur les données immédiates de la conscience*, Quadrige/PUF, 1889=2007  
(『意識に直接与えられたものについての試論』)

MM: *Matière et mémoire*, Quadrige/PUF, 1896=2008 (『物質と記憶』)

カント『純粋理性批判』からの引用は哲学文庫版を使用し、原著の第一版と第二版をそれぞれ A と B で示し頁数を付す。

本稿の目的は、ベルクソンのいう「空間の憑依」とはどのようなものか、その内実を明らかにすることである。第1節では、「数える」という行為から空間の導入を図るベルクソンの議論を確認する。第2節では、空間の本性とされる等質性と無際限な分割可能性が何に由来するかを示す。第3節では、不可入性をめぐる議論を通じて空間と対象との関係に迫る。第4節では、空間に関するカントの立場とベルクソンの立場の共通点と相違点を探る。第5節では、空間の等質性と経験の根底にある異質性について考える。これらの議論を通じて、空間に憑依されるという事態が何を意味しているのか明らかにする。

## 1 数の形成と空間

何かを数えるとき、私たちは複数の項を一つずつ足し合わせていき、その総計を求める。『試論』第二章の冒頭で、ベルクソンはこの行為が成り立つために必要な条件を論じている。ここでは、総計を求めるためには項がどのようなものでなければならないかが問題になる。私たちは何でも数えられるわけではないのだ。数えられる項のあり方はさしあたり二つ挙げられる。

第一に、それぞれの項が数えられている間保存されること、それも「何らかの場所によって区別される」(DI 57) ように並べられることである。項が途中で消え去ると総計を求めることができないので、諸項は同時に表象されていなければならない。また、私たちが想像のうちで数えるときに起こりがちなことであるが、別々だった諸項が一体化してしまったらやはり総計は求められないので、それぞれの項を分けておく場が必要である。こうした場の総体をベルクソンは「空間」と呼ぶ。空間はまず、同時的な併置を可能にするものとして導入されるのだ。

第二に、数えられる項が「相互に絶対的に類似している」(DI 57) こと、つまり等質であることが求められる。諸項が相互にまったく異なっていた

ら「列挙することはできても、もはや総計を求めることはできない」(DI 57)であろう。だが、諸項のこの等質性は何に由来するのだろうか。二つの可能性が考えられる。数えられる対象そのもの、あるいはそれらが並べられる場としての空間のいずれかである。

対象がそもそも等質であると無条件に考えることはできない。羊飼いが羊を数えるという場面を想定しよう。個々の羊は色も大きさも微妙に異なっているので、羊飼いは一頭一頭を「苦も無く見分ける」(DI 57)。こうした個体的特徴のみに注意している限り、羊飼いは羊の数を求められない。そこで彼は「観点」を変更し「個々の差異を無視する」(DI 57)。そうすることによって、はじめて羊は数えられる項であるとみなされる。一見すると、この等質性は個々の共通点から直接引き出されるように思われるだろう。しかし、羊飼いが自分の飼っている羊についてそうであるように、私たちはなじみ深いものに接するときにはそれぞれに固有のあり方を見出してしまうのであり、複数のものが等質だとみなされるためには、そのような固有性を捨象する態度変更が要求されるのだ。

態度変更がなされるのは、対象が等質な媒体を通じて覚知されるからである<sup>2</sup>。空間はそのような媒体としても機能する。私たちは、相互に異質にしか見えず、共通の尺度が見当たらないものを空間に並べることで同列に扱うことができる。

こうして、空間は二つの役割を背負わされることになる。対象がそこに位置する場であり、私たちがそれを通じて対象を覚知する媒体であることから、空間は対象と区別される。数えられる項のあり方に関する条件は、むしろそれらが並べられる空間のあり方に関する条件である。しかし、空間が併置の場であることと等質な媒体であることとはどのように関係するのだろうか。具体的な何か、とりわけ物体を数えることが問題になる場合、

---

2 「…私たちはそれら〔諸単位〕を同一のものと想定するが、それが考えられるのは、諸単位が等質的媒体のうちで並ぶ場合のみである。」(DI 92)

空間だけを取り出すことは困難である。ベルクソンは媒体としての空間を  
いわば純化するため、抽象的な数の形成という場面を想定する (DI 58)。  
ここでは数を形成する過程に三つの特徴が見いだされる。

第一に、数が形成される過程は二重の意味で不可分である。数は単位  
を加えていくことによって形成されるのであるが、この単位は、少なくと  
も加算がなされているときには分割されない。こうした暫定的な不可分性  
を支えるのは「精神の単純な働きの単一性」(DI 60) である<sup>3</sup>。私たちは  
あるものに注意を向けているあいだ、それを不可分なものとみなしている  
からだ。また、数を形成する作業が中断されるや否や数は完成するのだから、  
その作業そのものも全体として不可分である。

第二に、数が形成される過程は不連続なものでもある。「数を得るため  
には、その数を構成する個々の諸単位に代わるがわる注意を固定しなければ  
ならない」(DI 61) のである以上、ある単位から次の単位への移行は  
「唐突な飛躍」(DI 61) にならざるを得ない。従って、形成途上の数は  
「ぎくしゃくした動き」(DI 61) によって変化する。

第三に、それぞれの単位が新たに付け加えられるごとに、形成途上の  
数は質的に変容する。「…たとえば三番目の単位は、他の二つの単位へ付  
け加えられることによって、その総体の本性、様相、そしてリズムのよう  
なものを変容させる。このような相互浸透とある種の質的進展がなければ、  
いかなる加算も可能ではないだろう。」(DI 92)

形成途上の数とは、数が形成される不可分かつ不連続な過程そのもの  
であり、新しい単位が加わるごとに質的に変化しているものである。これ  
に対して、形成された数は既に加算され終わった諸単位の総体であって、  
形成された過程の跡をとどめない。ベルクソンは、この形成された数の特  
徴を連続性に見ている。

---

3 「[数の] 構成要素である諸単位の暫定的な単純さはまさに精神に由来するのだから…」(DI 63)

総体は連続性のあらゆる性質を示す。だからこそ *c'est pourquoi*、一定の法則に従って構成された数は、任意の法則によって分解されうる。

(DI 62)

次節では、空間もこの連続性を共有していること、およびそのことから導き出される空間の本性について言及する。

## 2 空間の連続性

抽象的な数は空間上に配置された物質的対象ではなく、空間の部分単位として形成される。空間は媒体であるとともに素材であり (DI 63)、形成された数は空間の一部として、空間と同じ性質をもつ。すると、形成された数とともに空間もまた連続的であり「だからこそ」任意で分割可能だということになる。このことをどう理解すればよいのだろうか。連続的なものが単に分割可能であるというのならまだしも、連続的であることを理由に分割できるというのは大変奇妙に思われる。

ベルクソンは空間を「連続的な一本の線、あるいは鎖」(DI 75) というイメージによって理解している。その含意は、諸部分が「同時に覚知され」(DI 75)、また「一方の隣りに他方を *l'un à côté de l'autre*」(DI 75) という仕方で、つまり「相互に浸透せず、接触する」(DI 75) という形で併置されるということである (線のみでなく、鎖のイメージが持ち出されるのは、こうした隣接性を示すためだろう)。

諸部分というものを想定する以上、それらを分かち間隙が必要である。しかし、その諸部分は隣り合い、接触し合うのだから空間そのものには間隙がない。したがって分割に用いられるのは、空間そのものには属さず、思考のうちで立てられ思考のうちで取り消すことのできる間隙、「空虚な間隙」(DI 65) である。

以上のように、空間が連続的であるということは、それ自体のうちに区別や分割の根拠を含まないということと等しい。「だからこそ」私たちは「空虚な間隙」を用い、空間を思考のうちでどのようにでも、「任意の法則にしたがって」分割することができる。空間は決定的な仕方、つまり後戻りできないような仕方では分割されえないというまさにそのことによって、任意の（したがって無際限の）仕方で分割可能である。

ベルクソンは明言しないものの、以上のような意味で連続性を考えた場合、空間の等質性もまたそこから帰結する。相互に異質であるもの（あるいは同じことだが固有の質をもつもの）は、もし区別されるとしたら、それら自体のありかたによって分かたれるだろう。空間を異質な諸部分から成るものと考えた場合、私たちはそれを任意の仕方で分割することができない。したがって、連続的なものである限り、空間は一切の異質性を（そして一切の質というものを）排除しなければならない。こうした質の欠如こそベルクソンが等質性と呼ぶものである。<sup>4</sup>冒頭で述べたような態度変更が可能であるのは、私たちが等質な空間を通して対象を覚知し、そのことによって対象を等質なものととらえる「観点」を手に入れるからだ。

私たちが何かを数えるとき、そして数を形成するときには連続的なものである空間が「直観」（DI 57）されており、そのことによって等質で無限に分割可能な媒体が得られ、そこへ位置づけられた対象が数えられる項へと仕立て上げられるのだ。

しかし、数える、あるいは数を形成するという場面のみ注目する限り、そして空間がその際に用いられる媒体にとどまる限り、「空間の憑依」という事態を十分に明かしえない。ベルクソンにおいて「対象が位置づけられる」という以前にそもそも対象というありかたを可能にするのが空間にはかならないからだ。次節では、不可入性をめぐる議論を通じて空間と対象性の関係に迫る。

---

4 「ここでは、等質性はあらゆる質の不在からなるのであり…」（DI 73）

### 3 不可入性と対象性

不可入性は重さや抵抗と並ぶ「物体の根本的性質」(DI 65) であると考えられている。しかし、重さや抵抗、あるいは色や音と異なり、私たちは不可入性の感覚をもつことができない。物体同士が不可入であるという認識はむしろ、相互の浸透や融合が表象しがたいという事実によって否定的に得られる。「不可入性が真に物質の性質であり、感官によって知られるならば、抵抗を欠いた面や重さのない液体を考えるよりも、二つの物体が一つに融合するのを考えることのほうにより困難を感じるのはなぜであるのか分からない」(DI 66)。これは理解可能性の問題である。私たちは二つの物体が同時に同じ場所を占めるという事態を想像することも表象することもできない。こうして不可入性は「論理的必然性」(DI 66) へと帰着する。「二つの」物体であることと、同時に同じ場所を占めることがそもそも相容れないのである。物理的、可感的性質よりも、二つ（あるいは複数）であることと空間上の併置（相互に浸透せず隣接する）との本質的關係（というよりは同一性）がここでは重要になる。

二つあるいは複数の対象は同じ場所を占めることができないと述べることによって、人はそれら対象の表象に何かを付け加えたと思ひ込んでしまう。あたかも、二という数一たとえ抽象的なものであっても一の表象が、空間における二つの異なる位置の表象ではないかのように。  
(DI 66)

不可入であるということは、対象の表象に何一つ付け加えない。相互に浸透したり融合したりする諸対象がもしあるとすれば、私たちはそれを「いくつの」対象と呼べばよいのか。対象は、たとえ物理的なものでなくても、「一つの」対象である限り不可入である。そして、不可入性が空間



上の併置に帰着するのだとしたら、結局のところ対象がその名で呼ばれるのは空間上に併置されるからである。これまで、対象を自明のものとし「対象が空間上に併置される」という表現を用いてきたが、これを逆転させなければならない。空間上に併置されるものを対象と呼ぶのである<sup>5</sup>。

先に見たように、空間は任意の仕方で分割可能である。このことは、ある法則にしたがって分割されるとき、他の法則によっても分割されうるということ、あるいは区別そのものが他の区別の可能性を含んだ形でしか成立しえないということを意味する。空間の連続性（決定的な仕方で分割されないということ）の含意はこのようなものである。

さて、バルクソンは空間と空間上に並ぶ対象との関係を二重の仕方とらえているとみてよい。一方で、すでに述べたように媒体としての空間は対象と区別される。他方、対象は、それが並ぶ場である空間と同じ性質を帯びるとも考えられている。そうでなければ、対象性が以下のように規定されることを説明できない。

実際、私たちは全面的かつ十全に知られるように思われるものを主観的と呼び、絶えず増加する多くの新たな印象によって、それらについて現に私たちの抱いている観念が置き換えられ得るような仕方で認識されるものを対象的〔客観的〕と呼ぶ、ということに注意しておこう。  
(DI 62)

(…)、ある物体が思考によってどのような仕方で分解されても、その全体的相 l'aspect total に変化をもたらすものは何もない。なぜなら、これらの多様な分解は、他の無数の分解と同様、実現されていないとはいえ、イメージのうちですでに可視化されているからである。分割

---

5 「等質的媒体についてのこの直観は…私たちに諸事物の対象性を明かし…」 (DI 177)

されていないものにおける下位分割の覚知、それも単に潜在的なものではなく現勢的な覚知、これこそまさに私たちが対象性〔客観性〕と呼ぶものである。(DI 62-3)

空間と同様、対象も任意の仕方でも無際限に分割され得る、というだけでは不十分だ。ここでも順序を入れ替えなければならない。無際限に分割され得るような仕方では知られるものを対象と呼ぶのである。ここまでくると、空間は対象を数えるときに「導入される」(DI 75) ただの媒体ではない。詳しくは次節に譲るが、人間は諸対象をそれとして認識すること、つまり区別された形で理解し、これに向き合うことなしには生きられないのであって、常に区別が可能な状況に身を置いているのでなければならない。空間は媒体 milieu であるが、それは必要な時に用いられる道具のようなものではなく、私たちがともにいなければならないもの、つまり環境 milieu でもある。ベルクソンが空間の憑依に言及するとき、その第一の含意は私たちが生きるために、常に、そして全面的に空間に依存しているということである。

#### 4 直観と概念形成

さて、以上のようなベルクソンの空間論は、カントのそれと極めて近いものに見えるかもしれない。『試論』においてベルクソンはカントを名指しで批判しているのだが、その矛先はカントが時間を空間と同様等質的な媒体ととらえたこと、その結果「自由が理解困難な事実になってしまった」(DI 175) ことへと向けられており、「空虚で等質的な媒体」という空間の位置づけについていえば、(少なくともベルクソンから見て) 両者は立場を共有している。「…私たちは等質的空間を想定し、カントとともに、この空間をそれを満たす質料から区別した。彼とともに、私たちは等質的空間が私たちの感性の一形式であると認めた。」(DI 177、傍線は引用者)

この側面だけを見ると、空間に関するベルクソンの議論は超越論的感性論から一步も出ていないように映る。しかし、以下の箇所注目すると、カントへの忠実さは微妙なものになる。

これら〔拡がりをもたない諸感覚〕の共存から空間が生じるためには、これらすべてを同時に包括し併置する精神の働きが必要である。この独特な sui generis 働きは、カントが感性のアプリオリな形式と呼んでいたものによく似ている *ressemble assez*。(DI 70、強調はベルクソン)

完全に同一なのではなく「よく似ている」とはどのようなことか。また、なぜ「精神の働き」と「形式」とがよく似ているのであろうか。この箇所は次のように続く。

今、この働きを特徴づけようとするれば、それは本質的に、空虚で等質的な媒体の直観 *intuition*、あるいはむしろ空虚で等質的な媒体という概念の形成 *conception* にある、ということが理解されるだろう。(DI 70)

これまで空間について用いられてきた「直観」という語がここでは「概念形成」に置き換えられ、後者の方がより正確に「精神の働き」を示すものとされる。「精神の働き」という何らかの過程を連想させる表現や、カントとの関係についての理解はこの「直観」と「概念形成」の意味にかかっている<sup>6</sup>。ここで重要になるのは、等質的空間の概念が得られる仕方、あるいは得られるということ自体である。

博物学者たちによると<sup>7</sup>、ある種の動物は遠く離れた巣へ素早く、そし

---

6 この「直観」と「概念形成」の違いについては Worms (2007) pp.10-11 および Worms (2013) p.43 を参照した。

7 Conry (2000) p.251 によれば、ここで念頭に置かれている「博物学者」は Sir

て迷うことなく戻ることができる。巢の位置を思考によって理解しているわけではない。これらの動物にとっては、それぞれの方向や位置が質的に異なった意味や価値をもつのであり、その固有のニュアンスによって彼らは導かれるのである。動物は「諸対象を覚知するが、対象同士を、そして対象と自分自身をそれほど明瞭に区別しない。」(DI 177) したがって、「動物は…おそらく私たちと同じようには外界を表象しない。」(DI 103)

ベルクソンにとって、等質的空間の表象は「区別することへの飽くなき欲望」(DI 96) にかられた生物種にとってのみ逃れがたいものであり「人間に固有の直観」(DI 177) によってもたらされるものである。それは精神の働き、より具体的には人間的な「知性の努力」(DI 71) により形成される。したがって、人間と「別の知性」(DI 177) をもつ動物が等質的な媒体を通して外界を表象しているということは「非常に疑わしい」(DI 71)。こうして、動物と人間との比較を手掛かりに、等質的空間の特徴が明かされる。

「知性の努力」について検討してみよう。「努力」であるからには、等質的空間を獲得する過程というものが含意されているはずだ。先に「直観」と区別された「概念の形成」とは、この「知性の努力」によって等質的空間の観念が得られる過程の全体を指す。しかし、その具体的な段階や進展を想定することはできない。形成途上の空間なるものを考えることができないからだ。第2節で数についてみたように、形成途上のものは絶えず質的に変化している。しかし、空間は質をもたないものであるため、このような変化を容れない。したがって、等質的である限りにおいて空間は既に形成されたものとしてしか表象されえない<sup>8</sup>。

---

John Lubbock、Fabre、Wallace、Darwin の四人である。

- 8 杉山は生成変化が存在せず、すべてが完了してしまっているあり方を「完了相」と呼び、ベルクソンにおいて「空間にとって『完了相』的性格は、他の諸性質に比して基本的なものとして捉えられている」と述べる。杉山(2006) 115-116 頁。

等質的空間は、その概念を形成する精神の働き、「知性の努力」によってもたらされた結果である。しかし、そのような経緯は忘却され隠蔽されてしまう。そのため、等質的空間は獲得されたものであるにもかかわらず、所与のものであるかのような外観を呈すことになる。あるいは、所与のものとしてしか獲得されえない。その限りにおいて、つまり結果としての等質的空間にだけ注目する限りにおいて、「精神の働き」を「感性のアプリオリな形式」と呼びうる。だが、空間を得る過程があるということまで考え合わせたとき、両者を同一視することはできない。「よく似ている」という表現が含むニュアンスは以上のようなものだと考えられる。

## 5 等質性と異質性

動物は等質的空間の表象抜きに外界を知覚する。したがって、「延長の知覚と空間概念の形成とを、区別しなければならないだろう」(DI 71)。こうして、「あらゆる外感の現象の形式」(A26=B42)という空間の地位は相対化される。もっとも、ベルクソンが生物間における知性の段階を念頭に置いているのに対し<sup>9</sup>、カントは明らかに人間だけを想定している以上<sup>10</sup>、こうした動物の外的表象を持ち出したところでカントへの批判としては機能しない。ここではカントとの比較を離れてベルクソンの議論展開をたどることにしよう。

動物が直接感じ取っている異質性は「自然のいたるところ」(DI 72)にあり、「私たちの経験の基底そのもの」(DI 72)をなす。空虚で等質な媒体としての空間観念は、こうした異質性への「一種の反発」(DI 72)として要請されたものにほかならない。動物の帰巢本能に驚愕する者は何を自

---

9 「知的な諸存在の系列の高みに向かうほど、等質空間という独立した観念がより明瞭に現れるだろう。」(DI 71)

10 「したがって、私たちは人間の立場からのみ空間や拡がりをもつものなどについて語るができる。」(A26=B42)

明視すべきかについて完全に誤っている。あらゆる位置や方向の異質性を鋭敏に察知する動物の諸感覚よりも、「質的差異化の原理とは別の差異化の原理」(DI 71)をもつこと、「質なき空間を知覚したり、その概念を形成したりする特殊な能力をもつこと」(DI 72)のほうが「異様 *extraordinaire*」(DI 72)なのである。こうして、等質性が異質性への反発である以上、後者の方が根底に存することになる。それだけではない。

等質的な面上の二点によって私たちの網膜上にもたらされる諸印象相互の差異を強調すればするほど、質的異質性 *hétérogénéité qualitative* としてみずから与えられるものを等質的延長の形で認識する精神の働きにより多くの場が与えられるだけだろう。もっとも、等質的な空間の表象が知性の努力に負うのであれば、反対に、二つの感覚を差異化する諸々の質そのもののうちに、諸感覚が空間のうちでしかじかの定められた位置を占める理由があるはずだと私たちは考える。(DI 71)

等質的空間中の位置が定められるには、何らかの理由が必要である。異質性こそがまさにその理由になるとベルクソンは考える。したがって、異質性なしで位置の差異はありえない。「質的差異化の原理とは別の差異化の原理」であるはずの空間が、異質性を欠いては機能しないことがここで明らかになる。

実は私たちは異質性をそのまま感じ取る「可能性」(DI 72)へと開かれている。たとえば、左右は「自然な感情」(DI 72)によって区別され、質的に異なるものととらえられる。しかし、こうした異質性は等質的な媒体における位置の差異として理解されてしまう。固有の質はそれ自体で差異をなすのだが、相互の差異として考えられるときには、それぞれが区別されたうえで比較される必要があり、したがって空間の中で併置されねばならないからだ。異質性は等質性よりも根底にあり、かつ等質的空間が機能するために不可欠のものでもある。異質性こそ諸対象が区別される根拠に

ほかならない。にもかかわらず、私たちは等質的空間内であらかじめ区別された諸対象を比較したうえで相互の異質性を見定めているかのように表象する。

前節では、ベルクソンが等質的空間を知性の努力によって獲得されたものと考えていたことを、本節では彼が等質的空間は異質性に先立たれ、なおかつ依存しているとみていたことを確認した。しかし、どちらにおいても等質的空間がそれとして現れるまでの経緯は隠され、所与のもののみなされる。等質的空間は、それがあるといっただけで外的表象の条件という地位を排他的に担い、他のありえたかもしれない表象の仕方を妨げる。こうしたあり方もまた、私たちが「空間に憑依される」ことを側面から支えていると考えられる。

### 結論（展望）

「空間に憑依される」とは、空間から逃れがたいという事態である。このことについて考えるとき、まず思い浮ぶのは身体との関係ではないだろうか。私たちが身体を備え、そして身体が空間のうちにある以上、私たちは空間から離れることができない。しかし、これまで見てきたように、『試論』でのベルクソンはまったく違う論じ方をしている。ベルクソンが「空虚で等質な媒体」と呼ぶ空間は完全に形式化されており、身体と無関係である。それどころか、第4、第5節で見たように、生物の身体は周囲を異質なものととらえ、等質的空間を介さない形で外界を表象できる。

しかし、『物質と記憶』では、空間は「物質に対する私たちの行動の図式」(MM 237)であり、したがって、身体に対して意味をもつものとして現れる。このように空間の位置づけが変化したとき、本稿で見てきた「空間の憑依」というあり方はどうなるのか。その帰趨を見極めるのが次の課題になる。

## 文献表

- Conry, Yvette (2000) *L'évolution créatrice d'Henri Bergson*, L'Harmattan.
- Heidsieck, François (1961) *Henri Bergson et la notion d'espace*, Press universitaires de la France.
- Worms, Frédéric (2007) «Présentation», in Bergson, Henri, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, PUF.
- (2013) *Bergson ou deux sens de la vie*, 2<sup>e</sup> éd, PUF.
- 杉山直樹 (2006) 『ベルクソン 聴診する経験論』創文社

(にしやま・てるお 慶應義塾大学文学部非常勤講師)

## L'obsession de l'espace chez Bergson

Teruo NISHIYAMA

Dans le deuxième chapitre d'*Essai sur les données immédiates de la conscience*, Bergson a tenté de présenter l'idée de durée. Il est difficile de la trouver à l'état pur parce qu'une autre idée, celle d'espace toujours y intervient subrepticement. Pour l'homme, l'espace est le milieu vide homogène dans lequel les objets se juxtaposent. Nous avons l'habitude profondément enracinée de se représenter et penser dans l'espace. Autrement dit, nous sommes obsédés par l'espace. Le but de cet article est d'éclaircir l'idée bergsonienne d'espace et de montrer la nature de cette obsession. A première vue l'idée d'espace vide homogène semble la forme *a priori* de la sensibilité. Mais, certains animaux perçoivent le monde extérieur sans le milieu homogène. L'idée d'espace homogène est le produit d'un effort de l'intelligence humaine. Mais, comme nous ne pouvons pas voir le processus de la formation de cette idée, elle est conçue comme la première donnée. C'est la raison pour laquelle



nous ne pouvons pas facilement nous débarrasser de l'espace homogène.